陶器の里

私たちの秋の職場旅行に陶器の小鹿田(おんた)も入っていた。職員と共に坂本茂木さんの窯(かま)を訪れ、ごっそり買って、彼を喜ばそうと思った。

しかし、坂本君は一向に売る気はなさそうだし、品物も申しわけていどに無造作に置いてあるだけ。わが一行の婦人たちは、文字通り手のつけようもなく、ただもじもじするだけ。私は連れの一人にささやいた。「僕の代わりにあの湯のみ二十個買ってくれ。おれが買うとタダにされるから」と。一個百円のそれらがとてもよい色をしていた。

客たちには無愛想であるが、彼は改めてロクロの前に座り、作業を見せてくれる。この里を訪れる本当のいみは、手作りの現場を見ることにある。だのに、わが一行は安い買い物探しが目当てになってしまい、彼の親切心は伝わりようもなかった。

たまたま先日（十二日）の「灯」に坂本君は、心のうちを語っている。売るためのものであるが、どうしても「商売人になりきれない」と。それは登(のぼ)り窯(がま)の宿命として、

一、二割は廃品、二、三割は不良品、そのうえ大半は卸に出さねばならない。だから軒先のものは不良品。後ろめたくて、とても笑顔にはなれないという。

裸灯の下、山村若者の集いで、君は言っていたね。「私は指先だけは傷つけないよういつも気をつけています」と。

あの農村不況時、白面の坂本少年の言葉が痛々しかった。同時に、君の指が土のいのちの前に純粋で敬虔であることに強く心を打たれた。

以来三十五年――。「灯」の君の文は、「民陶祭の催しに気が進まない」といい、そして、「大変ご無礼を申しあげました」と結んでいる。君の無礼は堂々としていて、すがすがしい。

（一九八七年十月二十六日）